濃尾平野に残る水田の跡

～北方京水遺跡から確認された2面の水田跡～

調査課　笠井　慎吾

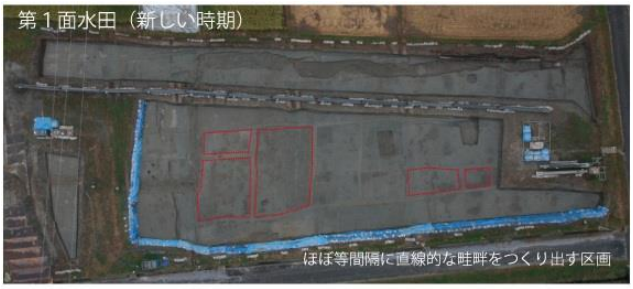
考古学コラム「きずな」NO.11
平成 27 年 10 月 1 日

＜はじめに＞

濃尾平野上にある我が家（揖斐郡池田町）の周りにはたくさんの水田が広がっています。水田一区画の面積は様々ですが、どの水田にも共通して言えることは、「直線的な畦畔に区切られた四角く整った形をしている」ということです。地域によっては、丸い形をしたものや山の斜面を利用したものもありますが、多くの水田はこのような整った形をしているものではないでしょうか。では、このような水田の区画はいつ頃から見られるものなのでしょう？今回は、平成 25 年度に発掘調査を行った北方京水遺跡の調査成果から考えてみたいと思います。

＜北方京水遺跡から確認された２面の水田＞

北方京水遺跡は大垣市北方町に所在する中世を中心とした遺跡です。平成 25 年度に行った発掘調査では、中世における二つの時期の水田や居住域と思われる範囲が確認されました。当遺跡もまた濃尾平野上にあり、この辺りでは当時も米作りが行われていたようです。

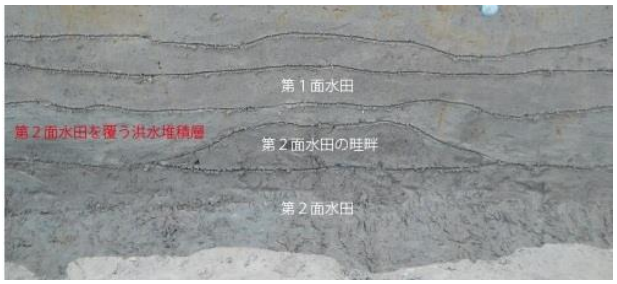


【写真１　北方京水遺跡で確認された２面の水田】

写真１は当遺跡で確認された２面の水田です。土を掘り下げていくと、まず上の第１面水田が確認され、次に下の第２面水田が確認されました。上が新しい時期、下が古い時期の水田となります。この２面の水田の区画をよく見ると、形が異なっていることが分かると思います。第２面水田では、自然の地形に合わせて水田が区画されているため、畦畔も曲がっています。一方で、第１面水田では、ほぼ等間隔に直線的な畦畔を作り出しています。また、第１面の水田では、第２面でみられたような土地の高低差はほぼなくなり、平坦な水田を作り出していたことが分かりました。このように水田を作り替えることになったきっかけは何だったのでしょう？その理由は、土層断面から明らかになりました。

＜水田を作り替えたきっかけ＞

写真２は、北方京水遺跡の土層断面の様子です。第２面水田の上面には、全体を覆う洪水堆積層が確認されました。第２面水田は、洪水によって大きく破壊されたため、その水田を復旧させて第１面の水田を作り出したと考えられます。その復旧の際に、土地を平坦にして条里地割に沿った水田区画を行ったようです。当遺跡の中心的な時期と考えられる 12 世紀後半から 13 世紀前半は、地域の有力者による墾田開発が各地で行われた時期です。北方京水遺跡だけでなく、他の地域でもこの時期に大がかりな水田の造成が行われ、現在のような整った水田区画の原形が出来上がったのかもしれません。



【写真２　北方京水遺跡の土層断面の様子】

＜おわりに＞

今のような重機や精密な測量機があったわけではない時代に、自然地形に手を加えて土地を平坦にし、等間隔に条里地割に沿った直線的な畦畔を作り出すというのは容易なことではなかったはずです。しかし、当時の人々はそのような大がかりな造成工事を行い、自分たちの力で水田を作り替えました。現在のような水田区画ができた背景には、過去の人々の努力の積み重ねがあると言っても過言ではありません。

さて、私たちの住んでいる地域の水田が今のような形になったのはいつ頃なのでしょう？今後行われる発掘調査によって、それが明らかになるかもしれません。